



昼下がりの情事は列車の中で。

女は結婚してしまうと羞恥というか、慎しさというか、そういう女性としての美德を失ってしまうという。

確かにある意味当たっていると思う

結婚したことで女性特有の過剰な自意識も一緒に影をひそめてしまうようだ。

だから自分が男の目にどう映っているかという意識が薄れ、男はみんな獣というような好奇心の裏返しがなくなってしまう。

もっとどろどろした、男と女の肉の関係のほうがかか

る。つまり欲望には忠実で貪欲になる。

僕が年上の、それも三十代から四十代の女性ばかりに痴漢行為をはたらくのは、彼女たちがそれを嫌ってないからだ

た。要点は相手の年齢ではなく、結婚しているかいないかが大きな分岐点となる。

いきなり明確に痴漢行為をはたらくと、若い女の子の恥じらいがないだけ逆に大騒ぎにならないとも限らない。

だが、大人しい感じの主婦だったり、年齢の割りに色気過剰な化粧やフアツションだとまず大丈夫だ。

軽く事故のように見せかけてふれてみて、離れていくようなら深追いはしない。

中には痴漢だと分かると自分から近寄って来る女もいて、どちらが痴漢で痴女だか分からない時もある。

もちろん初めからそれと知っていたわけではなかったし、若い女の子ばかりをねらう痴漢の常習犯でもなかった。偶然に満員電車で、買物帰りの主婦にふれてしまったのが、そもそもの始まりだった。

買物帰りといっても近くのスーパーの買い物包みを抱えていたわけではない。デパートの紙袋を持ったなかなかオシャレで上品なひとだった。

歳は三十歳の前半といったところ。

列車の中は混んでいた。

逃れるスペースがなく、彼女の背中に押しつけられていた。彼女は扉のほうに向いて紙袋を守るような形で立っている。さわる気はなかったが、手のひらがヒップに押しつけられて抜けなくなっていた。

これで無理に手を抜こうと動かすと、逆に変に思われると、思つて（じゆうぶん変ではあるが）、じっとしていた。

僕の手をお尻に感じていながら、平気な顔ですましている。列車が急な動きをするたびに手のひらが僕の体と彼女のヒップに挟まってごそごそ動く。

臀部の割れ目さえはつきりとわかるほどだった。



なんとか誤解をとこうと焦っていた。

列車の揺れが反対方向に動いた時、やっと僕は手を抜き出すことに成功した。だが揺り返しで今度は股間が彼女の豊かなお尻に押しつけられた。

ズボンの前は完全にテントを張っている。

それがスカートが一番盛り上がった部分、ヒップの丸みに押しつけられてしまったのだ。

ズボンとスカートの布地を通してさえ、妙に柔らかい感触がリアルに伝わってくる。

思わず「うっ」とのどが詰まるほど敏感になっていた。これではもうどうやっても言い逃れできない。

さすがに彼女も、少し顔をねじってこちらを見た。目と目とがあつた瞬間、僕は小声で「すみま、せん……」と謝った。怒られるかと思つたが、違つていた。クスツと笑うと、体をひねりさわりやすい体勢をとつてくれたのだ。

つまり体の前面を僕に向けて、手にした紙袋を体の横に持つてきて密着した部分を隠してくれた。

混乱してしまった。

どうすれば良いか分からない僕に、彼女はクスクス笑いながら小声で囁いた。

「どうしたの、さわりたいんでしょ」

つまり痴漢して良いと言っているのだと悟つた時には、列車は運悪くホームにすべり込んでいた。

僕たちのいる方の扉が開いて、二人はホームに押し出されてしまった。

人波に押されて彼女の手から紙袋が離れてホームに転がり、それを素早く拾って手渡した。

僕は真つ赤な顔で、すみませんそんなつもりじゃなかったんですとまた謝った。

「いいわよ。若いんだから魔がさす時もあるわよね。それに面と向かって謝られちゃ、怒れないでしょう。私もまだ魅力があるんだってことなんだし」

痴漢がバレてしまつて、謝つたと誤解している。

だがあえて真実を伝えず、魅力がありますよと半ば下心アリで話していた。

「じゃ、今度から私とあつたら、さわつてもいいわ。時間があいたらつき合つてあげてもいいし」

そして二度目の痴漢のあと、僕たちは近くのラブホテルに行つた。

むしろ刺激的な出会いを楽しんでいるのは彼女の方だった。僕が一方的にさわるのではなく、彼女の方から近寄つてくるようになったのだから。

専業主婦で暇を持てあましているのだろう。

刺激に飢えている感じだった。ホテルに入ると、彼女の方が積極的だ。

「ねっ。私のアソコなめてくれない。主人は自分のことばかりで、そういうことはしてくれないよ」

不満があるはずもなく、シャワーも浴びないでスカート
を捲りあげただけの格好でクンニリングスに励むことになつた。

「そこ、そこよ。ああ、ああ、良いわア。もつとよ。それに、そこーっ！」

痴漢行為で充分な刺激を受けていたのは彼女のほうも同じだつたらしい。

服を完全に脱がない方がより刺激的だ。

さらに貪欲に刺激を求めている。スカートはそのままパ
ンティだけを完全に脱いでペニスを受け入れた。

焦らさされていたせいか、僕は挿入するとすぐにイッてし
まった。

彼女はそれ以前にクンニで達していたので、むしろ挿入す
ることによつてちゃんとした満足感を感じられたと後で話し
てくれた。

それからやっと服を脱ぎ、ベッドに横になったのだが、こ
の時も積極的だったのは彼女の方だ。

元気にしてあげると、自分から進んでフェラチオしてくれ
た。

若い女の子とは経験の違いが歴然としている。

舌で筒先をちろちろ舐めたり、浅く深く緩急とり混ぜるテ
クニツクはじつに巧みなものだった。

もちろんまたクンニリングスを再開しシツクスナインの体
位で挑む。すると今度は腰の上に馬乗りになり、騎乗位で腰
をふつた。

この姿勢だと腰の動かし方しだいで、ペニスが肉壺の中で
強く当たる部分が微妙に違ってくる。

動かし方を変えながら、主導権を握る形でどこまでも貪欲
に快楽を貪っている。

見上げる僕も一心に、両方の乳房を揉みあげる。彼女は何
度か達した後、やっと主導権を僕に譲り渡してぐったりした。

一度果てていたし、彼女が達するたびに少し動きを止めて
いたせいで、射精が何度もはぐらかされていた。ペニスが鈍
感になっっている。

四つん這いにさせると、バックからかなり強引に突き立て

て、前後に激しく動いた。

こうなつてしまつたと、彼女は「おうーっ！」とか、「あうあう」とか、言葉にならない喘ぎ声だけになり、年上の女を征服する喜びに夢中になつてしまつた。

イツた時には、自分でも驚くほどの快感だつた。満足度は百二十パーセント。

それでも興奮は収まらなかつた。ぐつたりする彼女を、やや強引に、正常位でつなぐると、まだ完全には硬度を取り戻していかないペニスを動かした。

膣の穴の中は、蜜液と僕の放つた樹液でベトベトだつた。どつぷり浸かつた感触は、摩擦係数を減らしいるようで動かしやすかつた。

ゆっくり楽しむように唇を吸つたり、乳首ををしゃぶつたり、思いのままだつた。

気だるげに応えてくる年上の彼女。まるで子供をあやすようにしてくれた初めて経験に陶然となつてしまつた。

だが三回目は、不意だつた。

気を抜いていたというか、明確な前ぶれがなかつたというか……。

ここで初めて一息入れて、彼女と一緒にシャワーを浴びて、ホテルを出た。

「すごいわ。久しぶりに満足しちゃつた。今度から時々あつてよね」

と、お互いの携帯電話の番号を教え合つてから、二人は分かされた。

それから待ち合わせは列車の中で、それも痴漢プレイを前戯にそのままホテルに直行という関係が続いている。

電話がかかってくるのは、平日の昼間が圧倒的に多かった。持っている携帯電話のメモリーには、五人の人妻の携帯の番号が記録してある。

専門学校生の僕は、このために早退したり休んだりで、学校の勉強はみんなからやや遅れるようになってしまった。

列車は通学のためでなく、女と男の刺激的な出会いの場と
かしている。

もう昼下がりの情事から抜け出せなくなっている。

おかげで毎日が忙しく、恋人を作る暇も必要も感じない。

